

Press Release:2011.12.8

京都造形芸術大学陶芸コース3回生グループ

【〇十八 - おはこ -】展

2012年1月31日(火) — 2月5日(日) 11:00~19:00 ※月曜休・最終日18:00まで

ご案内

Gallery PARC[グランマーブル ギャラリー・パルク]では、2012年1月31日から2月5日まで、「京都造形芸術大学陶芸コース3回生グループ:〇十八(おはこ)」展を開催いたします。

本展覧会は京都造形芸術大学 美術工芸学科 陶芸コース3回生18名によるグループ展です。
毎年、陶芸コース3回生に在籍する学生自らが会場を選び、その空間を意識しながら作品を制作・発表するもので、本年度6回目を数えます。

展覧会タイトルである「〇十八(おはこ)」は、18名の出品作家を表すとともに、おもに歌舞伎で云うところの「十八番(おはこ)」に重ねたものです。

同じく陶を学ぶ18名の作家による作品は、器からオブジェまで、表現の方法・内容はいずれも異なりますが、その多彩・多様な作品をひとつの空間に展開することで互いの「違い」を意識し、相互に影響しあいながらも、それぞれの魅力を引き出す機会となるのではないのでしょうか。

また、鑑賞者においては多様な陶による表現をご覧いただくとともに、日々、表現を深める現在進行形の若い作家達の「今現在の十八番」をお楽しみいただけるのではないのでしょうか。

つきましては、本展の周知にご協力くださいますようよろしくお願いいたします。

本展の周知・広報にご協力頂ける際に、広報用画像をご用意しております。
本リリース掲載画像からご希望の画像番号および掲載媒体情報を明記の上、Gallery PARC[galleryparc@grandmarble.com]迄ご連絡ください。
尚、個人の鑑賞および利用を目的とする場合は、画像の貸出しはお断りしておりますのでご了承ください。



【画像】本展DM

【開催情報】

展覧会名 京都造形芸術大学陶芸コース3回生グループ 「〇十八 -おはこ-」展

出品作家 京都造形芸術大学陶芸コース3回生18名

上村 菜奈、岡田 志穂、櫻田 奈津美、川内 奎人、坂本 圭、櫻澤 克征、下河邊 悠史、砂島 朱里、坪田 結花、畑 えみ、林 莉紗、朴 時温、平子 侑香、藤田 遼、本城 宏和、松本 千奈美、横井 利行、吉田 公騎

会 期 2012年1月31日(火) — 2月5日(日) 11:00~19:00 ※月曜休廊・最終日18:00まで

会 場 Gallery PARC(グランマーブル ギャラリー・パルク)

〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48 三条ありもとビル[ル・グランマーブル カフェ クラッセ]店舗内2階
【Tel & Fax】075-231-0706 【Mail】galleryparc@grandmarble.com 【HP】http://www.grandmarble.com/parc/

料 金 無料

アクセス 阪急河原町駅・三条京阪駅より徒歩10分、地下鉄東西線京都市役所前駅より徒歩3分

お問い合わせ Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・パルク] (正木・永尾)

〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町弁慶石町48 三条ありもとビル [ル・グランマーブル カフェ クラッセ] 2F
【Tel & Fax】075-231-0706 【Mail】galleryparc@grandmarble.com

Press Release:2011.12.8

【展覧会について】

本展覧会は京都造形芸術大学美術工芸学科陶芸コース3回生による、初めてのグループ展です。

展覧会タイトルである「〇十八」は、18人という大人数のグループ展であることとともに特別な意味を込めており、「十八番(おはこ)」を表しています。

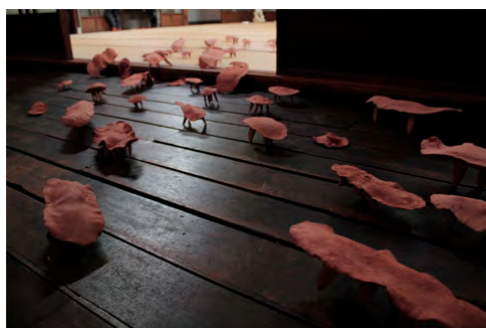
同じ空間で制作している私たちは、粘土という素材を使い、18人それぞれの想いを巡らせて制作しています。

ひとりひとり違う“色”を持ち、その思想は常に交差し合っています。

18人のバラバラのその“色”を1つの空間に共存させることでお互いの作品を意識し合い見つめ直し、ひとりひとりの「十八番(おはこ)」を引き出す場になればいいなと思っています。

京都造形芸術大学陶芸コース3回生

【出品作家】*参考画像はすべて過去作品



上村 菜奈(うえむら なな)

【制作コンセプト】

日頃近くにあるはずなのに、視覚では捉えられないものや意識しないと認識しないものに興味があります。今まで、細胞や土埃などをモチーフにしてそこから自分のドローイングで出てきた形にし、それを数十点作って展示したりしています。

テーマとしては小さなものが集まってかたまりを作りひとつのものとして存在しているという共通性で作品を作っています。

今回はそれらのものと私との、距離感やタイムラグを作品という形に落とし込みたいと思い制作しています。

【参考画像】 つちぼこり 2011



岡田 志穂(おかだ しほ)

【制作コンセプト】

いつも自分がそのとき作りた作品を作るようにしている。

なので、白っぽい作品を作っていたのがいきなり黒くて渋い作品ばかりになったり、お茶碗ばかり作っていたのが、コップばかり作るようになったりする。

どうしてそんなに作りたモノがコロコロ変わるのかなと考えてみると、その時好きな作家さんの作風に、大分影響されていると思う。その作家さんが白土に絵付けをする人なら、同じように白土に絵付けをし、赤土のお茶碗がきれいと思ったら赤土でお茶碗を引いた。

形や色は近づけていないのに、どこか模倣的。それに気づいてから無性に自分の作風が欲しくなった。どんなことをしたら作風になるかわからないので、とりあえず自分の好きな色や形、作り方を集めて作品を作っている。

自分の好みに近づけるのが一番大切だと思うから。

今回の作品も、いかに自分らしさを出せるかを目標に作っている。

【参考画像】 無題 2010



檜田 奈津美(かしだ なつみ)

【制作コンセプト】

思い出は過去の日々のぬげがらである。日常の中に当たり前のように存在していたものたちの、カタチだけが「今」に残り、「あのこと」の日常はどこかへといってしまう。日常というものは、絶えず移ろっている。

見たこともない世界が気付くと日常になり、会ったこともない人がいずれいつもの仲間になり、知らなかったことを知り、知っていたはずのことを忘れ、日常であったことがいつの間にか過去になる。

それは当たり前のことで、大昔からある決まりのようなものだ。

それでもたまに、この日常がいつまでも続くといいのに、と願ってしまうことがある。

こんな毎日がずっと続くんじゃないだろうか、と願ってしまうことがある。

その思いは、かなしくて、少し美しい。

【参考画像】 りんご、死んだ 2011



川内 奎人(かわち けいと)

【制作コンセプト】

生命を感じさせる動きだったりそういった形を日常で使用する陶器の中に落としこみ、いつもの食事が新鮮に感じたり、そこに置いてあるだけでいいなと思ってもらえるような作品づくりを目指して活動しています。

今回の作品は流線的なカップとそれに合わせたソーサーをセットにし、磁器土のシャープな印象と土ものの温かい表情を1つの作品に表現しました。

無骨でありながらもどこかポップでかわいらしい部分を感じてもらえれば幸いです。

陶芸を学んではや3年が経とうとするなかで少しずつ見えてきた自分が本当にやりたいことや、興味。

それは後々変化していくかも知れないけど、今この瞬間に自分が感じていることはこの先の人生に大きく関わってくることは間違いないと思います。そういうものを大切に作品づくりをしていきたいと思っています。

【参考画像】 スライム 2011

Press Release:2011.12.8



坂本 圭(さかもと けい)

【制作コンセプト】

普段は土物が好きで、それに憧れそういったものを作りたくて日々鍛錬しています。技術面等でほかのみんなにはるかに劣ってしまう私ですが、私らしいものを作れたらいいなと思っています。過去に作ったもので粉引茶碗があります。なかなか茶碗の厚さだったり化粧の具合だったり難しいものばかりでした。基本的なことがまだまだ自分自身甘いと思っておりますが、今回の展覧会では、モチベーションを上げるためにも自分自身の好きなものをモチーフにしたものを作ろうと思っております。今回は私の趣味であるダーツを取り入れようと思いました。ダーツにはパレルという真ん中の鉄の部分があるのですが、そこのパレルの部分というのは物によって、太さが違っていたり、刻まれている溝が全くと言っていいほど違うのです。パレルの鉄っぽい質感を出すための釉薬もある程度目星はついてます。

【参考画像】 粉引き茶碗 2011



櫻澤 克征(さくらざわ よしまさ)

【制作コンセプト】

今までの自分の作風から見てきた、作られた作品の持つ力強さやエネルギー、パッションという、視覚でとらえられない、何かを作品から放出させてみたい。また、その作られたものと、その物の存在する空間を自分が求めているイメージに近づけさせたい。今まで経験してきた、僕がいつも感じている、自分の中のアートと呼ばれる美意識に素直に挑戦してみようと思えます。粘土の持つ特異なテクスチャーや手先の感覚の造形に、どこまで食い込めるのか。作品の持つテクスチャー、色あい、細かさや粗さ、潔さといった、ものではない、純粋な美なるものを探求してみます。

日常生活の中で、何かふと目を奪われてしまった経験はおありでないですか？

僕は「佇むもの」をテーマに、作陶します。

【参考画像】 iremon 2011



下河邊 悠史(しもこうべ ゆうじ)

【制作コンセプト】

今の自分の中には何が詰まっているのか。
今までの自分、これからの自分。きっと全て違うのだろう。
なぜ違うのか。毎日私たちは色々な人と関わって生きている。
共に過ごし、語り合い、絆を深める。
人と関わることで、生きていける。
そんな大切な、人と人の語り合いの場に。

【参考画像】 gear 2011



砂島 朱里(すなはた あかり)

【制作コンセプト】

私が作品を生み出す原動力は、生命力・魂である。
私の見える生命力は、静かに立たずんでいるが絶えず色を揺らめかせて様々な物を感じているように思える。その生命力が強い存在として一番大きいのは、自然・樹・植物など生物にとって生きるために必要な存在なのではないかと感じる。その中でも、今自分に近い存在が「樹」である。
樹は、毎日動物のように動き回るものではないが、日々人間のように呼吸をして大地の栄養をもらい生きつづけている。その力は、様々な物にエネルギーを与え地球・大地をじっくり見据えているようにみえる。
私は、土から生命力の流動を受けとり人間とは違うスピードで生きていく樹に惹かれた。その樹の中にある根はなんなのを感じていきたい。本展ではその一環として「呼吸」というテーマで生み出していく。呼吸は生きている証のひとつ、そのひとつに目向けて生命力の根に入り込んでいきたい。

【参考画像】 想 2011



坪田 結花(つぼた ゆか)

【制作コンセプト】

「器」というのを「人柄」ともいう。
ファッションや雰囲気など、なりたいイメージを描くように、作るものにも共通する理想を持つ。
モダンでクールなちょっと背伸びしたものに憧れる。だから表面的に近づこうとする。全部一緒。
陶器の見た目の概念や素材感を変える。新たな表情を作り出そうとする。
初めて見たときの衝撃や心に響いた感動をそっくりそのまま形に出来たら。頭の中のイメージを形に出来たら。
ソクソクするような、触ってみたいと思わせられるものを形にしてみたい。
今はそのテクスチャーを自分なりの表現で作り出す方法を探す。
自分の手で形を作ることが面白い。なりたいモノになれるように。
いろんな「器」を作ってみよう。そのための手段は自分の手から生まれさせよう。
同じ器だから陶器で漆器を作ってみよう。透き漆の透明感。軽さ、柔らかさ。
China=磁器で Japan=漆器というのが面白い。私は陶器でJapanを作ろう。
フサホロホロ町の模様は鳥じゃないみたい。モダンでクールでソクソクした。
同じソクソクを表現してみよう。
感じたままを土で作ろう。もっとやりたいことがたくさん。

【参考画像】 ホロホロ井 2011

Press Release:2011.12.8



畑 えみ(はた えみ)

【制作コンセプト】

しまうまのおしりは、やわらかそうやかたそう、おもしろい形、なぜかとても惹かれる。道に、白い馬がいても自然に感じるのだけど、しまうまがいたら…白い馬よりも、黒い馬よりも縞があるだけで、違和感を感じる。なにか、惹かれるものがある。日常だけど、ちょっとだけ非日常。そんな作品を作りたいと思ってます。

【参考画像】 same 2009



林 莉紗(はやし りさ)

【制作コンセプト】

普段、何気なく生活している中で、私たちは無意識のうちに五感をつかい、沢山のことを感じている。感じたことの中には「喜び」「怒り」「哀しみ」「楽しみ」のすべてが含まれる。そのすべては、感動である。陶芸を通じて自分自身の感動を表現し続けてきた。

ショパン(Frédéric Chopin)は私が最も愛する作曲家である。

今回はショパンの「ピアノソナタ第2番 変ロ長調作品35」を目にみえない音楽という存在ではなく、目にみえる陶芸という存在で表現したい。

【参考画像】 Zilch 2011



朴 詩温(ぱく しおん)

【制作コンセプト】

私は一回性の時、「祈り」というテーマで作品を作ったことがあります。このごろも、また興味を持ち始めて、そういうテーマで作品を作っています。最近「祈り」って私にどんな意味を持つのかを考えながら、作品を作っています。祈りというのは、人によっていろいろな考え方がありますが、私は「この世の苦しんでいる人のために」だと思っています。最近、私が想像もつかない最悪のニュースが世界のあちこちで起こっているのを見ながら、私はこの世の苦しんでいる人のために何が出来るのかと考えます。今の私はあまり出来ることが少ないと思います。でも、私が苦しんでいる人のために祈ることで、私の心に少しでも苦しんでいる人の痛みが伝えられるし、祈ることで苦しんでいる人と私は少しでもひとつに慣れると思います。それで、私はそのような情念を作品へ詰め込まないといけないと思います。

【参考画像】 祈り 2011



平子 侑香(ひらこ ゆか)

【制作コンセプト】

私はよく夢を見る。真っ暗な闇の中に浮かびあがる、美しい草原と城。目が覚め、風景を良く思い出そうとすると、その瞬間、記憶は薄くぼやけてゆき、曖昧なものへと変化してしまう。考え事や瞑想をしている時、心の奥を見つめていると、ふと、確かな「何か」を掴めそうになる事がある。確かにそこに在るように感じられるのに、近寄り手を伸ばそうとすれば、あと少しのところで見失ってしまう。掴めそうで掴めない、とても惹かれる確かな「何か」。それは子供の頃に思い描いた夢の世界であり、自分自身であり、自分にとって唯一確かなもの。境界線も曖昧な世界にまだ曖昧なそれを探す、その感覚。

【参考画像】 月の裏 2009



藤田 遼(ふじた はるか)

【制作コンセプト】

「完成された形」は動くことを止め、それ以上も以下もなく存在し続ける。では、その形の一部分が破損していたら？どんな風に見えるだろう？また違った風に見えるのではないだろうか。同じモノなのに。完成されていたはずのものが、ある変化がおきた瞬間に違うものに生まれ変わってしまう。私はその可能性を見出したい。壊したり。くっつけたり。融解させてみたり。違う形と融合させてみたり。あらゆる方法で。少し変えるだけで、ガラリと印象が変わる。新たな形が生まれる。自分が予想もしなかったようなものが。元は同じ形なのに。全く違うモノに。再び生まれる。いくらでも。何度でも。

【参考画像】 Re: 2011

Press Release:2011.12.8

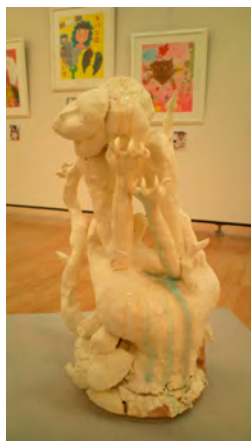


本城 宏和(ほんじょう ひろかず)

【制作コンセプト】

造形大に入学して三年が経ち様々な技法を学び自分の目指す形というものが大体は見えてきた気がします。しかし、今年は自分の不注意などもあり、陶芸に対して全力を注ぐことができませんでした。本展では改めて自分の目指す陶芸というのを確認し、それに一歩でも近づくために全力を尽くすということをし、私の『誓い』というイメージである杯(サカズキ)を作りたいと思います。

【参考画像】 初 2011



松本 千奈美(まつもと ちなみ)

【制作コンセプト】

今の自分の中にある、自分やその周りなどに影響されて出来ていく流動的な存在を、『今』の現状として出来る限りの解釈として、訪れた人を迎える存在、問いかける存在としてギリシャ神話に登場するスフィンクスをモデルに具現化したい。

【参考画像】 倒木更新 2011



横井 利行(よこい としゆき)

【制作コンセプト】

自分の感性の追求。己がカッコいい、好きだ、興味がある物を駆使して作品を作り出す。感性とは何だろう？そんな疑問から、私自身が考え着的一つの答えが先ほど述べた「カッコいい、好きだ、興味がある」などの自分の拘り、もしくは趣味や好みから来るものではないかと思った。なので、それを展覧会に向けて、より一層押し出していこうと考えた。そこでピックアップしてきたのが「ハンス・コパー」と「クリムト」である。ハンスの成型された器を新たな形に置き換える手法。クリムトの近代的な金による色彩。それらを己の中で昇華させて、自分自身を表現できないかと思つた。まるで物語の主人公の様な自分とそれを護る親。そんな関係を表す作品だ。

【参考画像】 一膳 2011



吉田 公騎(よしだ こうき)

【制作コンセプト】

よく漫画や映画などの創作物に登場する物として、一つの小さな個体が大量によって一つの大きな個体を形成したようなキャラクターがあります。SFなどではよく見られる物ですが、私はこれに昔から惹かれる物がありました、理由はよくわかりませんがなんとなく面白いと思つてしまいます。なので今回の作品は、こういうシーンでもっとも使われる事の多い、虫によって大きい生物の形を作り上げてみようと考えています。何をやるかについては、現時点では、一般的に昆虫で強い存在とされるカブトムシを元にした生物を作ろうと思つています、そしてそれを構成する虫も、カナブンや、クワガタなどの甲虫を中心にします。集合体の大まかな形はカブトムシに忠実にしますが、映画にでてくる怪物のような物を意識して、見た人を少し引かせるようなグロテスクなデザインにします。

【参考画像】 群体 2011